

## How To Be Leather Master

Leather School  
Leather School  
Leather School  
Leather School

いつも並んで作業をする3人は、経験年数も近いのでよく相談相手。意見を交換しながら作業をすすめる。一つの鞆につき、使うパーツの数が50にのぼることも。右の写真はその管理の為に仕様書。これも大事な仕事だ



1. 革漉き機で革の厚みを薄くする。革を曲げたり、縫う部分に合わせて複数の型を使い分ける。チャックを付ける場合はマドスキを使う。2. カーブしている部分には腕ミシンを使用。3. 革に型紙をあて、重しを置いて固定し、革包丁でカットしていく



革包丁  
一番思い入れがあるのは革包丁とのこと。「最初は緊張して、なかなか革に刃を入れることができませんでした」



「Lähellä」シリーズより。「複数の鞆を持つ女性を見て、一つにまとまるたっぶりサイズのをデザインしました」。内側にはペットボトル用のホルダーも



鞆作りに必要な道具の一部。やっここ、全鋸、刷毛、定規、縫製用の糸など。一通りの作業や流れを覚えるまでがひと苦労で、時間もかかった

### 職人其の二

# 一から十まで 作り上げる 楽しさで一杯

靴職人 津山郁子さん

Company ■ Data  
株式会社京谷  
大阪府東住吉区橋全5-11-25  
Tel.06-6714-0120

## My Work History



- 1967年 大阪府大阪市生まれ。小学校時代はお菓子屋や花屋に憧れる。高校ではフォークソング部に入部。のちにバンドを結成し、社会人になっても数年活動を続けた。短期大学に入学。専攻は染色で、着物の染めや織りを学ぶ。就職。着物の業界は募集も少なく、デザイン系の職を探したが、未経験では難しくデータ入力の仕事に就く。もの作りに携わりたい思いがあり、転職。CADを使い、スポーツウェアのサイズ展開を手がける。
- 1985年 専攻は染色で、着物の染めや織りを学ぶ。就職。着物の業界は募集も少なく、デザイン系の職を探したが、未経験では難しくデータ入力の仕事に就く。もの作りに携わりたい思いがあり、転職。CADを使い、スポーツウェアのサイズ展開を手がける。
- 1987年 専攻は染色で、着物の染めや織りを学ぶ。就職。着物の業界は募集も少なく、デザイン系の職を探したが、未経験では難しくデータ入力の仕事に就く。もの作りに携わりたい思いがあり、転職。CADを使い、スポーツウェアのサイズ展開を手がける。
- 1991年 3度目の転職で、婦人服のサイズ展開を手がける。
- 1995年 結婚の予定を控え、退職。翌年結婚。
- 2001年 長男を出産する
- 2003年 離婚後、子供の保育園に近い場所でパートを探し、製造業である京谷へ。
- 2005年 鞆の縫製の仕上げ作業をする。
- 2008年 社長より、社員として製造に携わらないかと提案され快諾。熟練の職人に教わりながら、夢中で作業を覚える。バッグを一人で完成させられるようになる。
- 2009年 自社ブランド「Lähellä」(ラヘラ)を中心となって担当する。

### 子どもの頃の夢は？

→お菓子屋さんか花屋さん

### この仕事を志したきっかけは？

→パートとして勤務していたところ、縫製の方で働くチャンスももらい、サンプルが切れるようになりたいと思い始めました。やりがいを感じるのは、何も無いところから型紙を作ってそれが商品になり、お客様に選んでもらえることです。

### 今後の目標は？

→向上心をもち続けて、スポンジのように何でも吸収したいです。夢は、革の風合いが生かされるヌメ革で大きな旅行用のバッグを作ること。私自身、それひとつを持って旅行に出かけたいと思っています。

### この仕事を指す人にメッセージを。

→私はチャンスももらってこの仕事に就くことができましたが、誰にでもできていると思っています。好きなことなので、努力しているという気持ちはありませんが「志」は大事だと思います。同じ目標をもつ仲間に出会えることも貴重です。



社長・京谷政孝さんの席へ製造過程に相談へ行くこともしばしば。「きっかけをいただき感謝しています」

## 靴

の製造に携わって3年になる津山さん。もともと、縫製の仕上げをするパート勤務だったが、入社3年目、社長から社員として鞆を作れないかと提案があり快諾したのが始まりだ。「前職で、CADを使ってスポーツウェアのサイズ展開を手がけたり、婦人服の型紙を作っていました。鞆のサンプルを作るのはまったく新しい世界でした」。

最初は、この道50年の職人の下につき、包丁の磨き方や糸の交換から覚えた。順序も何もわからず、サンプルを作るのに何日もかかり、自主的に家に持ち帰って作業することもあったそう。作業の手順を模索すると同時に、革の伸び縮みの方向など素材の知識も徐々に覚えていきました。最初は、革に包丁を入れるのに本当に勇気がいって、高価な素材なので神経を使いましたし、練習が必要だと実感しました。そして、修練の日々が続き、一年後によやくひとりで商品のデザインから完成までもっていきけるようになった。

京谷社長の思いはこうだ。「職人が減ってきている業界の現状に不安もあったんです。彼女のような新しい職人が育ってくればよいな。うちは女性向けのオリジナルの商品がほとんどなので、女性ならではの感性も大切。女性の職人が他に2名

いますが、皆頑張ってくれています」。津山さんにとっても、同僚はいい意味で刺激になる存在だ。社長は「昔なら、職人になかなかやらせてもらえなかった作業を、直接教わることができるのは今の時代のよさでもありますね。やはり技術を伝達していくことは大切ですから」とも付け加えた。

立ち上げたばかりの自社ブランド「Lähellä」は、津山さんが中心となって手がけている。大人の女性にじっくり馴染む、長く持ち続けたいようなナチュラルなデザインが特徴で、シリーズ化して様々なタイプの鞆を生みだしている途中だ。「街を行く女性の鞆には自然と目がいき観察しています。日々鞆作りのことばかり考えています。いつか、自分の作った鞆を持っている女性を見かけられたら感激するでしょうね」。

現在、シングルマザーの津山さん。働く母の姿を見て、6歳の子供が最近「将来は鞆を作りたい」と言うようになったそうだ。それを聞いて、社長も顔をほころばせる姿が温かい職場の雰囲気をものさだ。

「この仕事をして今まで、苦痛だと思ったことは一度もありません。楽しくて」と始終輝いた表情の津山さんが印象的だった。